

健康登山12: 周辺の山07(天ヶ岳~ナッチョ)

コース	小出石 1.2km/20 天ヶ岳 0.5km/11 2.4km/62	シャクナゲ尾根取付 2.7km/90 鉄塔下 0.5km/11 ナッチョ 2.2km/73	寂光院道合流 1.3km/47 R477合流 1.7km/26 下山口 0.7km/10	百井思子淵神社 小出石バス停
水平距離	13.2km			
水平換算距離	17.5km			
累計高低差	登り902m、下り902m			
標準歩行時間	5:51			
実績歩行時間	6:07			
		断面図		



山行報告

山行日 2006・5・11(木) 天候 曇のち晴 参加者 9名

小出石バス停8:55 シャクナゲ尾根取付9:30 寂光院道合流11:23 天ヶ岳12:06 鉄
 行 動 塔下12:16~13:00 R477合流13:17 百井キャンプ場13:37 思子淵神社13:57 ナッ
 チョ15:04 分岐点15:22 下山口(登山口)16:17 小出石バス停16:32

記 録

周辺の山シリーズの一環として花の季節を選んでシャクナゲ尾根から天ヶ岳、百井集落、ナッチョを周遊するコースを歩いた。
 雨天予報が前夜に曇りのち晴に変わり、昨年6月に健康登山をはじめてから1年間連続して実行できるという幸運に恵まれた。
 国際会館8:20 発のバスは貸切状態で小出石まで運んでくれた。入念にストレッチをした後、シャクナゲ尾根の急坂に取り付いた。300m地点から150mほど登ると道も緩やかになり、先頭を歩いていたリーダーのHRさんが『シャクナゲが咲いています』と言った。シャクナゲ尾根というネーミングがふさわしい尾根道で下部では盛りを過ぎていたが上部は見頃だった。
 600m地点で寂光院からの道と合流し、天ヶ岳まで一気に登った。昼食は展望のよい鉄塔下で摂った。この頃から陽射しも出るようになり、東の方向に琵琶湖も見られた。
 昼食後、尾根筋を北に進み、百井峠付近で国道477号に合流し百井集落へ向った。集落の入口にキャンプ場があり、中ほどに思子淵神社が東端に百井分校跡がある。
 25、6年前に百井にある山友会の小屋を借りて皆子山岳会の家族コンパを開いたことなどを話題にしなが歩いた。杉の子(つくしの親)を摘んでいる村の人に料理法を教えてもらっている人もいた。お茶にしたり天ぷらにするとのことだった。
 分校跡のところから藁谷を通り、分岐点で山道に入りナッチョに着いた。
 ナッチョからは比叡山の北尾根がクッキリ見え、琵琶湖越しに三上山など湖東の山も見えた。このコースの最高地点812.6mの三角点を囲んで記念撮影をした後、小出石へ下った。急坂ではあるが歩きやすい道だった。ただし雨天時は避けた方がよさそうに思えた。
 小出石15:40発のバスにちょうど間に合った。バスは1時間に1本なので要注意。

周辺の山 (小出石~シャクナゲ尾根~天ヶ岳~ナッチョ~小出石)



シャクナゲ
10:14



シャクナゲ
10:57



シャクナゲ
の尾根道
11:14



天ヶ岳鉄塔下
から琵琶湖
12:54



百井へ向う
13:28



キャンプ場
14:00



思子淵神社
13:58



ナッチョから
比叡山北尾根
15:00



ナッチョにて
15:14



下山道
15:48

名所・旧跡ミニガイド（周辺の山：天ヶ岳、ナッチョ）

ナッチョ：地元では親しみを込めてナッチョと呼ばれている。ナッチョの名は納所^{のうしょ}が訛ったものといわれる。地図では天ヶ森、高谷谷山とも表示されている。

百井峠の石仏：鞍馬川上流の扶桑橋から百井谷を経て百井峠への道はかつて村と村を結んで里人達が行き交った旧道で、谷の上流も細くなり、咽も渴くころこの辺りに、大正時代までショウズの地蔵があった。ショウズとは水の湧き出る所の意。いまは百井峠に安置されている。

百井峠は分水界：百井峠は杉峠、前ヶ畑峠に連なる稜線に有り賀茂川と安曇川との分水界です。百井は安曇川を遡ってきた近江文化の系列に属する古い集落で、祭祀も安曇川筋の河童に由来する思古淵信仰が伝わる。
南の静原は上賀茂神社の神領、分水領は古きには安曇川水系の海人族と賀茂族領界でもあった。

天ヶ岳：百井では『テンガダケ』といい、静原では『アマガダケ』と言います。
洛北には大蛇に因む伝説が多く散らばっています。（大原おつうの森、江文神社大原雑魚寝、深泥池の大蛇等）豊作を願う竜神『水神』信仰に因むものでアマガダケも、恵みの雨に由来するかも知れません。
...京都民報より

古知谷阿弥陀寺：大原のかくれ寺、本堂横の岩窟の内には、開山^{だんせい}弾誓上人の遺骸(ミイラ)を納めたという大きな石棺が安置されている。
また紅葉も美しい所でもあり、焼杉山の登山口でもある。

補遺

- 1) ナッチョ：淀の納所は「のうそ」税金、年貢を納める所。納所は「ナツシヨ」となるところもある...方言化してナッチョ。大原『ナッチョ』は杣人が山仕事に必要な道具や雑穀などを納める小屋の様なもの、時には宿泊も兼ねた。この小屋がナッチョとして本格的に利用されたのは木炭運送の中継倉庫の役割を果たすようになってから。三谷峠の北麓に住む尾越や大見の人々にとって炭焼きは大切な生業であった、炭は問屋のある大原、八瀬まで運ぶため小出石に程近いナッチョ谷は木炭の中継貯蔵庫として格好の位置だった。
- 2) 天ヶ森：(ナッチョ)別の山名は高谷山。天ヶ森の「森」とは本来盛り上がった「山」を指す。朝鮮語では山の古い呼称を「モイ」といい、墓地を指すこともある。つまり山=墓、墓=山。アイヌ語で「モリ」といえば山ことであるが、東北地方で村の近くの木

の茂った丘は「もりやま」とゆう。森すなわち山は祖霊のこもる聖なる地である。大和の三輪山（御諸山）の「モロ」も朝鮮古語と同源の語であり「モロ」は「モリ」の古形である。

“北山を歩く”の著者澤 潔氏が出町柳から高野川沿いにナッチョ谷まで往復四十キの行軍遠足で植林。澤氏は旧制京二中の出身、当時の中山再次郎校長が明治43年創立十周年記念行事の一環として大原ナッチョ谷に土地を購入、杉や檜の植林開始。昭和16年大平洋戦争に突入するまで32年余続いた。年々植え継いで27町歩、谷をわたり山を覆う、営利でなく生徒に大自然に触れさせ、浩然（心などが広くゆったりしているさま）の気風を培うことにあり。琵琶湖にあるボート部の艇庫も、ナッチョ谷産の北山杉で建てられたといわれる。

- 3) 小出石：高谷川の小出石付近の谷を畑ヶ谷という、照葉樹林焼畑地であった縄文時代末期から焼畑による農耕開始と共に照葉樹林の伐採が進み飛鳥時代にはほぼ現状の植生に変わったといわれる。赤松林は焼畑農耕などによって照葉樹林がどんどん伐採された後、地味が痩せてから植生したものと考えられている。「畑」は火扁に田と書く。畑は火田であり、畠は白に田、白田であり、山地で焼畑から生まれたのが畑であり、水辺の湿地などを拓いたものが、もともとの畠であったと推測されている。
- 4) 古知谷：原義をたどると「コチ」は元もと「クツ」の転訛であろう、朽木村の「クツ」も、元もと「沓掛」の「クツ」である。昔は峠口で古くなった草鞋（クツ）をぬぎ捨て木などに掛け新しい草鞋に履き替える意の「クツ」であり、峠を越えて行く旅の安全を、ぬぎ捨てた古い草鞋に手向けして祈った。昔の途中越えは花折峠をも越えて難渋な旅が始まる、新しい草鞋に履き替えて旅の恙無きを、祈ったのであろう。
その意味においても沓掛谷でありいつの間にか古知谷になったのであろう。木の朽ちるほど多い「クツキ」「朽木」となり「クチ谷」「古知谷」となる。
- 5) 料理旅館“古知谷”：昭和20年8月5日の夜遅くから数日間、刺客の影に脅えながら、東条英機が若狭方面から途中越えで来て別館の離れの間で潜伏していたという。
- 6) 杣人：(そまびと) 山林技術労務者
- 7) 杣山：(そまやま) 木材を切り出す山、木材にするため木を植えた山。
- 8) 山人：(さんじん) 世俗を嫌って山中に隠棲する人、山で働く人（きこり、炭焼き）
- 9) 山窩：(さんか) 山地の河原など移動して漂泊生活を送っていた竹細工や狩猟などを業としていた人々。…さんわ。
- 10) マタギ：おもに東北地方の狩猟専門民。地名からかつては北山にもマタギが存在した？
- 11) 山賤：(やまかつ) 賤などと卑称された木樵、杣人。(西行法師も静原で賤を詠んでいる)
- 12) 山幸：(やまさち) 狩猟によって得た鳥獣や山で採取した山菜。山の幸。(山幸橋は...?)
- 13) 三千院：仏の眉間に白い毛の集まった所を白毫びやくごうという。仏の白毫にひたすら一念して心を集中すればやがて三千世界の仏を念ずる心に通じて救われるということ。一念三千。これが三千院の語源。
以上は参考文献“北山を歩く”より抜粋